

領域：	グローバル、超領域		
テーマ：	グローバリゼーションのなかでの消費社会の発展		
担当者名：	広渡 潔		
開講時期：	前期：火曜 4・5・6限	募集定員：	25名
内容：	<p>「モノ」という視点からグローバリゼーションを歴史的に俯瞰していく。砂糖を例にとろう。砂糖は中世には奢侈品であったが、17, 18世紀にかけて奴隷貿易と植民地でのプランテーションで価格が急激に下がり必需品となっていく。砂糖が必需品となることで西洋社会でコーヒーや紅茶の需要も増え、Coffee House, Tea Party,さらには Wedgwood のカップなど喫茶文化が形成され、まさに「消費革命」と呼ばれる現象が現れる。砂糖という「モノ」にはまさに帝国主義下での「植民地主義」の産物という「苦い」歴史と消費革命という「文明」の「甘い」歴史が共存している。</p> <p>こうした消費革命の背景にはしかし、消費についての革命的な思想の変化があった。中世以来の、節制を旨とし奢侈を毛嫌う道徳科学からの脱皮である。「消費は美德である」との言葉には消費抑制の長く暗い歴史と消費によって人間社会を啓蒙していくとの2重のメッセージが隠されている。「モノ」の効用を価値の源泉とみた近代経済学以前に、消費をめぐる道徳科学上の深い葛藤があったこと、19世紀においてグローバルな消費を促進するため「自由貿易」が政治経済学の大きな議論となる歴史的プロセスがあったことを看過してはならない。</p> <p>このプロジェクトでは「モノ」のグローバリゼーションに焦点をあてながら、近代消費社会の成立と発展、さらには砂糖、茶、コーヒーなどの「物産」の世界史、社会史へと議論を展開していく。加えて現代は正に環境問題により倫理的な消費のあり方が求められているが、それが果たして消費文明の新たな転換をもたらすのか、未来志向の議論も深めていきたい。</p>		
到達目標：	<ol style="list-style-type: none"> 1. 文献を読みながらグローバリゼーションについての多面的な理解を歴史的に深めていくことが大きな狙いである。 2. このプロジェクトは英語も含め、ひたすら多くの文献を読みながら、書く（レポート作成）、話す（Discussion）に繋げていながら総合的なリテラシーを引き上げていく。 		
講義方法：	<ol style="list-style-type: none"> 1. 各テキストを熟読しながら、最終課題のレポート作成に向けての supervision を組み合わせながら行う。 2. テキストについては、下記参照。 <p>① ‘Three Cultures of Consumption’, ‘The Enlightenment of Consumption’ (pp.21-118) <i>Empire of Things: How We Became a World of Consumers, from the Fifteenth Century to the Twenty-First</i>, by Frank Trentmann (資料はこちらで準備)</p> <p>② 「砂糖の世界史」(川北稔) (岩波ジュニア新書)</p> <p>③ 「茶の世界史 改版 - 緑茶の文化と紅茶の世界」(角山栄) (中公新書)</p> <p>④ 「珈琲の世界史」 (講談社現代新書)</p>		
準備学習：	特になし。		
成績評価：	<ol style="list-style-type: none"> 1. 最終レポートを60%、平常点を40%で評価する。 2. レポートについて5000字程度、またその内容についてプレゼンテーションを行う。 3. 平常点について、各講義毎の課題の提出、プロジェクトの授業参加度（質問、意見など）の他、取り組み姿勢やマナーなども総合的に勘案する。 		
欠席基準：	授業実施回数の3分の1(端数は切り捨て)以上を欠席した場合は、単位を修得することができない。		
講義構成：	<p>前半：グローバリゼーションと消費社会の進展についてBBCプログラムや関連映画、文献(①)を基に議論を重ねていく。</p> <p>後半：砂糖、茶、コーヒーの個別の物産にテーマをシフトし、それぞれの世界史、社会史を関連映画や文献(②、③、④)を基に、議論を重ねて行く。</p>		
履修条件：	特になし。		
推奨科目：	特になし。		
選考方法：	2、3年次生の受講を推奨する。		
備考：			
説明会：	特に行わないが、メールなどを通じて適宜面談は受け付ける		